

# 震度7の強震が2度襲った熊本地震から4年

## 本堂再建を果たした益城町と熊本市の2カ寺を訪ねる

2016年4月に起きた熊本地震から4年が経った。特に被害が大きかった熊本教区では、本堂が全壊、大規模半壊する甚大な被害を受けた寺院が46カ寺に及んだ。このうち18カ寺がこれまでに復興を遂げ、他の被災寺院も再建、修復計画に取り組んでいる。5月に新築した本堂の仮落慶を終えた熊本県益城町・浄信寺(小田孝行住職、70)、そして6月中には再建工事が完了する熊本市南区・良覚寺(吉村隆真住職、46)を訪ね、両寺の住職にこの4年間の歩みについて聞いた。

### 益城町・浄信寺

浄信寺は5月9日、お参りで訪れた農家で本堂の仮落慶法要とご聞いた門徒の一言。本尊の遷仏法要をつとめた。新型コロナウィルス感染症による緊急事態宣言を受け責任役員と門徒総代だけで行う予定だったが、仏僧員ら数人も駆けつけ、待ちわびたお念仏の道場の再興を静かに祝った。

同寺のある益城町は、2016年4月14日の前震、そして16日の本震と2度にわたり震度7の強震に見舞われた。被害は江戸末期に建てられた木造の本堂と、隣接する庫裏、鐘樓、町指定重要文化財の山門など、境内のほぼすべての堂宇に及び、「どうしようもない」としか言いようのない状態だった。

新築か修復か。いずれを選択するにしても、ほとんどの門徒が被災しているので募財の依頼は困難だった。悩む小田住職の背中を押したのは、震災後に



主要な柱には鉄骨を入れた。地下に納骨堂を設け、さらにその下には基礎杭を打ち込んだ。本堂内陣の宮殿、須弥壇、主な仏具は、修理して再使用。そして外陣の天井を飾る約

200枚の天井絵も旧本堂から引き継いだ。本堂内陣の宮殿、須弥壇、主な仏具は、進によるもので、花鳥や動物が色彩豊かに描かれている。約3分の2の絵が割れる「私一人の力では何もできない。お見舞いが来た。お見舞いに来てくださったご職が真竹の串で根気よく1枚ずつ修理した。」

「この絵が新たな本堂の天井に納まった時、長年にわたって先人らが守り伝えてきてく



### 熊本市・良覚寺

熊本市郊外の川口町は古くからの住民が多く、良覚寺の周辺には田植えを終えたばかりの水田が広がる。同寺は地域コミュニティの中心的役割を担ってきた。ハザードマップでは、良覚寺は災害時の避難所とされている。しかし、本堂が全壊、庫裏も大きな被害を受けたため、吉村住職ら寺族7人は車中泊の後に約2週間にわたって分散して避難所での生活を余儀なくされた。

「こんな時に寄付を頼んで大丈夫か」との不安はあったが、依頼の命を守る場所とならなければいけなかった。避難所になれなかつた。地域の復興のシンボルとなるよう、被災に強い本堂を再建しなければ」とい

6月中に終了する内陣部分(写真右下)を残してほぼ完成した新たな本堂(同右上)は、鉄骨造2階建てで、1階が本堂、2階が納骨堂。海が近く地盤が脆弱だった境内地の地盤改良を行った後、本堂の躯体を支える基礎部分に直径80センチ、長さ8メートルのコンクリート杭32本を打ち込んだ。木造の本堂の復興を喜び合う旧本堂に比べて格段は、間もなく訪れる。

「自分たちも被災して苦しい中にもかかわらず、身を削り、心を尽くして協力してくださった」と感謝している。

納骨堂には、庫裏の内仏に据えられていたご本尊を安置する。このご本尊は地震の際に激しく揺れた輪灯があたり、右手の4本の指が折れた。このうち3本は修復したが、中指だけは耐震性が強化された。



に耐震性が強化された。納骨堂には、庫裏の内仏に据えられていたご本尊を安置する。このご本尊は地震の際に激しく揺れた輪灯があたり、右手の4本の指が折れた。このうち3本は修復したが、中指だけは耐震性が強化された。